

源氏物語

末摘花

紫式部

青空文庫

皮ごろも上に着たれば我妹子は聞くこ
とのみな身に沁^{しみ}まぬらし
(晶子)

源氏の君の夕顔を失った悲しみは、月がたち年が変わっても忘れることができなかった。左大臣家にいる夫人も、六条の貴女^{きじよ}も強い思い上がりで源氏の他の愛人を寛大に許すことのできない気むずかしさがあって、扱いにくいことによっても、源氏はあの気楽な自由な気持ちを与えてくれた恋人ばかりが追慕されるのである。どうかしてたいそうな身分のない女で、可憐^{かれん}で、そして世間的にあまり恥ずかしくもないような恋人を見つけたいと懲りもせずにいる。少しよいらしく言われる女にはすぐに源氏の好奇心は向く。さて接近して行こうと思うのにはまず短い手紙などを送るが、もうそれだけで女のほうからは好意を表してくる。冷淡な態度を取りうる者はあまりなさそうなのに源氏はかえって失望を覚えた。ある場合条件どおりなのがあっても、それは頭に欠陥のあるとか、理^り智^ち一方の女であって、源氏に対して一度は思い上がった態度に出ても、あまりにわが身知らずのようであるとか思い返してはつまらぬ男と結婚をしてしまったりするのもあつたりして、話

をかけたままになつてゐる向きも多かつた。空蟬うつせみが何かのおりおりに思い出されて敬服するに似た気持ちもおこるのであつた。軒端のきばの萩おぎへは今も時々手紙が送られることとされる。灯影ほかげに見た顔のきれいであつたことを思い出しては情人としておいてよい気が源氏にするのである。源氏の君は一度でも關係を作つた女を忘れて捨ててしまふようなことはなかつた。

左衛門さえもんの乳母めのとといつて、源氏からは大式だいにの乳母の次にいたわられていた女の、一人娘は大輔たゆうの命婦みょうぶといつて御所勤めをしていた。王氏わうしの兵部大輔ひやうぶである人が父であつた。多情な若い女であつたが、源氏も宮中の宿直所とのいどころでは女房のようにして使つていた。左衛門の乳母は今筑前守ちくぜんのかみと結婚してゐて、九州へ行つてしまつたので、父である兵部大輔の家を実家として女官を勤めてゐるのである。常陸ひたちの太守であつた親王（兵部大輔はその息そくである）が年をおとりになつてからお持ちになつた姫君が孤児になつて残つてゐることを何かのついでに命婦が源氏へ話した。気の毒な気がして源氏は詳しくその人のことを尋ねた。

「どんな性質でいらつしやるとか御容貌ごきりようのこととか、私はよく知らないのでございます。内気なおとなしい方ですから、時々は几帳きちよう越こしくらいのことでお話をいたします。琴きんが

いちばんお友だちらしいゆうございます」

「それはいいことだよ。琴と詩と酒を三つの友というのだよ。酒だけはお嬢さんの友だちにはいけないがね」

こんな冗談じょうだんを源氏は言つたあとで、

「私にその女王さんの琴の音を聞かせないか。常陸の宮さんは、そうした音楽などのよくできた方らしいから、平凡な芸ではなかうと思われる」

と言つた。

「そんなふうにお招おほしめしてお聞きになります価値がございませうか、どうか」

「思わせぶりをしないでもいいじゃないか。このごろは朧おぼろづき月があるからね、そつと行つてみよう。君も家へ退うちさがつていてくれ」

源氏が熱心に言うので、大輔の命婦は迷惑になりそうなのを恐れながら、御所も御用のひまな時であつたから、春の日永ひながに退出をした。父の大輔は宮邸には住んでいないのである。その継母の家へ出入りすることをきらつて、命婦は祖父の宮家へ帰るのである。

源氏は言つていたように十六夜の月の朧おぼろろに霞かすんだ夜に命婦を訪問した。

「困ります。こうした天気は決して音楽に適しませんのですもの」

「まあいいから御殿へ行つて、ただ一声でいいからお弾かせしてくれ。聞かれないで帰るのではあまりつまらないから」

と強いて望まれて、この貴公子を取り散らした自身の部屋へ置いて行くことを済まなく思いながら、命婦が寢殿しんでんへ行つてみると、まだ格子こうしをおろさないで梅の花のおう庭を女王はながめていた。よいところであると命婦は心で思った。

「琴の音が聞かせていただけましたらと思うような夜分でございますから、部屋を出てまいりました。私はこちらへ寄せていただいても、いつも時間が少なくて、伺わせていただく間のないのが残念でなりません」

と言うと、

「あなたのような批評家がいては手が出せない。御所に出ている人などに聞いてもらえる芸なものですか」

こう言いながらも、すぐに女王が琴を持つて来させるのを見ると、命婦がかえつてはつとした。源氏の聞いていることを思うからである。女王はほのかな爪つま音おとを立てて行つた。源氏はおもしろく聞いていた。たいした深い芸ではないが、琴の音というものは他の樂器の持たない異国風な声であつたから、聞きにくくは思わなかつた。この邸やしきは非常に荒れて

いるが、こんな寂しい所に女王の身分を持つていて、大事がられた時代の名残なごりもないような生活をするのでは、どんなに味気ないことが多かろう。昔の小説にもこんな背景の前によく佳人が現われてくるものなどと源氏は思つて今から交渉の端緒を作ろうかとも考えたが、ぶしつけに思われることが恥ずかしくて座を立ちかねていた。

命婦は才気のある女であつたから、名手の域に遠い人の音楽を長く源氏に聞かせておくことは女王の損になると思つた。

「雲が出て月が見えないがちの晩でございますわね。今夜私のほうへ訪問してくださいさる約束の方がございましたから、私がおりませんとわざと避けたようにも当たりますから、またゆると聞かせていただきます。お格子をおろして行きましょう」

命婦は琴を長く弾ひかせないで部屋へ歸つた。

「あれだけでは聞かせてもらいがいもない。どの程度の名手なのかわからなくてつまらない」

源氏は女王に好感を持つらしく見えた。

「できるなら近いお座敷のほうへ案内して行つてくれて、よそながらも女王さんの衣摺きぬずの音のようなものを聞かせてくれないか」

と言った。命婦は近づかせないで、よりよい想像をさせておきたかった。

「それはだめでございますよ。お気の毒なお暮らしをして、めいりこんでいらつしやる方に、男の方を御紹介することなどはできません」

と命婦の言うのが道理であるように源氏も思った。男女が思いがけなく会合して語り合うというような階級にははいらない、ともかくも貴女なんであるからと思ったのである。

「しかし、将来は交際ができるように私の話をしておいてくれ」

こう命婦に頼んでから、源氏はまた今夜をほかに約束した人があるのか帰って行こうとした。

「あまりにまじめ過ぎるからと陛下がよく困るようにおつしやっていますのが、私にはおかしくてならないことがおりおりございます。こんな浮気うわきなお忍び姿を陛下は御覧になりませんかね」

と命婦が言うと、源氏は二足三足帰つて来て、笑いながら言う。

「何を言うのだね。品行方正な人間でも言うように。これを浮気うわきと言ったら、君の恋愛生活は何なのだ」

多情な女だと源氏が決めていて、おりおりこんなことを面と向かって言われるのを命婦

は恥ずかしく思つて何とも言わなかつた。

女暮らしの家の座敷の物音を聞きたいように思つて源氏は静かに庭へ出たのである。大部分は朽ちてしまつたあとの少し残つた透垣すいがきのからだが隠せるほどの蔭かげへ源氏が寄つて行くと、そこに以前から立つていた男がある。だれであろう女王に恋をする好色男があるのだと思つて、暗いほうへ隠れて立つていた。初めから庭にいたのは頭とうのちゆう中うじよう将しょうなのである。今日きようも夕方御所を同時に退出しながら、源氏が左大臣家へも行かず、二条の院へも歸らないで、妙に途中で別れて行つたのを見た中将が、不審を起こして、自身のほうにも行く家があつたのを行かずに、源氏のあとについて来たのである。わざと貧弱な馬に乗つて狩衣姿かりぎぬをしていた中将に源氏は氣づかなかつたのであつたが、こんな思いがけない邸やしきへはいつたのがまた中将の不審を倍にして、立ち去ることができなかったところに、琴を弾く音ねがしてきたので、それに心も惹ひかれて庭に立ちながら、一方では源氏の出て来るのを待つていた。源氏はまだだれであるかに氣がつかないで、顔を見られまいとして抜き足をして庭を離れようとする時にその男が近づいて来て言つた。

「私をお撒まきになつたのが恨めしくて、こうしてお送りしてきたのですよ。」

もろともに大内山は出^いでつれど入る方見せぬいぎよひの月」

さも秘密を見現わしたように得意になつて言うのが腹だたしかつたが、源氏は頭中将であつたことに安心もされ、おかしくなりもした。

「そんな失敬なことをする者はあなたのほかにありませんよ」
憎らしがりながらまた言つた。

「里分かぬかげを見れども行く月のいるさの山を誰^{たれ}かたづぬる

こんなふうに私が始終あなたについて歩いたらお困りになるでしょう、あなたはね」

「しかし、恋の成功はよい隨身をつれて行くか行かないかで決まることもあるでしょう。これからはごいっしょにおつれください。お一人歩きは危険ですよ」

頭中将はこんなことを言つた。頭中将に得意がられていることを源氏は残念にも思つたが、あの撫^{なでしこ}子の女が自身のものになつたことを中将が知らないことだけが内心には誇らしかつた。源氏にも頭中将にも第二の行く先は決まっていたが、戯^{じょうだん}談を言い合つてい

ることがおもしろくて、別れられずに一つの車に乗って、おぼろづきよ 朧月夜の暗くなった時分に左大臣家に来た。前駆に声も立てさせずに、そつとはいって、人の来ない廊の部屋で直衣のうしに着かえなどしてから、素知らぬ顔で、今来たように笛を吹き合いながら源氏の住んでいるほうへ来たのである。その音に促ねされたように左大臣は高麗笛こまぶえを持って来て源氏へ贈った。その笛も源氏は得意であつたからおもしろく吹いた。合奏のために琴も持ち出されて女房の中でも音楽のできる人たちが選ばれて弾ひき手になつた。琵琶びわが上じようず手である中将という女房は、頭中将に恋をされながら、それにはなびかないで、このたまさかにしか来ない源氏の心にはたやすく従つてしまつた女であつて、源氏との関係がすぐに知れて、このごろは大臣の夫人の内親王様も中将を快くお思いにならなくなつたのに悲観して、今日も仲間から離れて物蔭ものかげで横になつていた。源氏を見る機会のない所へ行つてしまうのもさすがに心細くて、煩悶はんもんをしているのである。楽音の中にいながら二人の貴公子はあの荒れ邸の琴の音を思い出していた。ひどくなつた家もおもしろいもののようにばかり思われて、空想がさまざまに伸びていく。可憐かれんな美人が、あの家の中で埋没されたようになって暮らしていたあとで、発見者の自分の情人にその人になったら、自分はまたその人の愛におぼれてしまうかもしれない。それで方々で物議が起こることになつたらまたちよつと自分は

困るであらうなどとまで頭中将は思った。源氏が決してただの気持ちであの邸を訪問したのではないことだけは確かである。先を越すのはこの人であるかもしれないと思うと、頭中将は口惜くちおしくて、自身の期待が危あぶなかしいようにも思われた。

それからのち二人の貴公子が常陸ひたちの宮の姫君へ手紙を送ったことは想像するにたかくない。しかしどちらへも返事は来ない。それが気になって頭中将は、いやな態度だ、あんな家に住んでいるような人は物の哀れに感じやすくなっていねばならないはずだ、自然の木や草や空のながめにも心と一致するものを見いだしておもしろい手紙を書いてよこすようにしなければならぬ、いくら自尊心のあるのはよいものでも、こんなに返事をよこさない女には反感が起るなどと思つていらいらとするのだった。仲のよい友だちであつたから頭中将は隠し立てもせずとその話を源氏にするのである。

「常陸の宮の返事が来ますか、私もちよつとした手紙をやったのだけれど何にも言つて来ない。侮辱された形ですね」

自分の想像したとおりだ、頭中将はもう手紙を送っているのだと思うと源氏はおかしかった。

「返事を格別見たいと思わない女だからですか、来たか来なかったかよく覚えていません

よ」

源氏は中将をじらす気なのである。返事の来ないことは同じなのである。中将は、そこへ行きこちらへは来ないので口惜くちおしがった。源氏はたいした執心を持つのでない女の冷淡な態度に厭いや気がして捨てて置く気になっていたが、頭中将の話を聞いてからは、口上くちじよ手な中将のほうに女は取られてしまうであろう、女はそれで好い気になって、初めの求婚者のことなどは、それは止よしてしまつたと冷ややかに自分を見くびるであろうと思うと、あるもどかしさを覚えたのである。それから大輔たゆうの命婦みようぶにまじめに仲介を頼んだ。

「いくら手紙をやつても冷淡なんだ。私がただ一時的な浮気うわきで、そうしたことを言っているのだと解釈しているのだね。私は女に対して薄情なことのできる男じゃない。いつも相手のほうが気短に私からそむいて行くことから悪い結果にもなつて、結局私が捨ててしまつたように言われるのだよ。孤独の人で、親や兄弟が夫婦の中を干渉するよううなるさいこともない、気楽な妻が得られたら、私は十分に愛してやることができるのだ」

「いいえ、そんな、あなた様が十分にお愛しになるようなお相手にあの方はなられそうもない気がします。非常に内気で、おとなしい点はちよつと珍らしいほどの方ですが」

命婦は自分の知っているだけのことを源氏に話した。

「貴婦人らしい聡明そうめいさなどが見られないのだろう、いいのだよ、無邪気でおつとりして
いれば私は好きだ」

命婦に逢あえばいつもこんなふうにな源氏は言っていた。その後源氏は瘡病わらわやみになつたり、
病気がなると少年時代からの苦しい恋の悩みに世の中に忘れてしまうほどに物思いをし
たりして、この年の春と夏とが過ぎてしまった。秋になって、夕顔の五条の家で聞いた砧きぬた
の耳についてうるさかったことさえ恋しく源氏に思い出されるころ、源氏はしばしば常陸
の宮の女王へ手紙を送った。返事のないことは秋の今も初めに変わらなかつた。あまりに
人並みはずれな態度をとる女だと思つと、負けたくないというような意地も出て、命婦へ
積極的に取り持ちを迫ることが多くなつた。

「どんなふうと思つているのだろう。私はまだこんな態度を取り続ける女に出逢つたこと
はないよ」

不快そうに源氏の言うのを聞いて命婦も気の毒がつた。

「私は格別この御縁はよろしくございませんとも言っておりませんよ。ただあまり内氣過
ぎる方で男の方との交渉に手が出ないのでしようと、お返事の来ないことを私はそう解釈
しております」

「それがまちがっているじゃないか。とても年が若いとか、また親がいて自分の意志では何もできないというような人たちこそ、それがもつともだとは言えるが、あんな一人ぼっちの心細い生活をしている人というものは、異性の友だちを作つて、それから優しい慰めを言われたり、自分のことも人に聞かせたりするのがよいことだと思うがね。私はもう面倒な結婚なんかどうでもいい。あの古い家を訪問して、気の毒なような荒れた縁側へ上がつて話すだけのことをさせてほしいよ。あの人がいと言わなくても、ともかくも私をあの人に接近させるようにしてくれないか。気短になつて取り返しのないような行爲に出るようなことは断じてないだろう」

などと源氏は言うのであつた。女の噂を関心も持たないように聞いていながら、その中のある者に特別な興味を持つような癖が源氏にできたころ、源氏の宿直所のつれづれな夜話に、命婦が何の気なしに語つた常陸の宮の女王のことを始終こんなふうとのいどころに責任のあるもののように言われるのを命婦は迷惑に思つていた。女王の様子を思つてみると、それが似つかわしいことは仮にも思えないのであつたから、よけいな媒介役を勤めて、結局女王を不幸にしてしまうのではないかとも思えたが、源氏がきわめてまじめに言い出していることであつたから、同意のできない理由もまたない気がした。常陸の太守の宮が御在世

中でも古い御代みよの残りの宮様として世間は扱って、御生活も豊かでなかった。お訪ねたずする人などはその時代から皆無といってよい状態だったのだから、今になってはまして草深い女王の邸へ出入りしようとする者はなかった。その家へ光源氏の手紙が来たのであるから、女房らは一陽来復の夢を作って、女王に返事を書くことも勧めたが、世間のあらゆる内気の人の中の最も引込み思案の女王は、手紙に語られる源氏の心に触れてみる気も何もなかったのである。命婦はそんなに源氏の望むことなら、自分が手引きして物越しにお逢わせしよう、お氣に入らなければそれきりにすればいいし、また縁があつて情人関係になつても、それを干渉して止める人は宮家にないわけであるなどと、命婦自身が恋愛を軽いものとして考えつけている若い心に思つて、女王の兄にあたる自身の父にも話しておこうとはしなかった。

八月の二十日過ぎである。八、九時にもまだ月が出ずに星だけが白く見える夜、古い邸やしきの松風が心細くて、父宮のことなどを言い出して、女王は命婦といひ泣いたりしていた。源氏に訪ねたずて来させるのによいおりであると思つた命婦のしらせが行つたか、この春のようになつと源氏が出て来た。その時分になつて昇のぼつた月の光が、古い庭をいつそう荒涼たるものに見せるのを寂しい気持ちで女王がながめていると命婦が勧めて琴を弾かせた。ま

ずくはない、もう少し近代的の光沢が添ったらいだろうなどと、ひそかなことを企てて心の落ち着かぬ命婦は思っていた。人のあまりいない家であったから源氏は気楽に中へはいつて命婦を呼ばせた。命婦ははじめて知って驚くというふうに見せて、

「いらつしたお客様って、それは源氏の君なんですよ。始終御交際をする紹介役をするようにってやかましく言っていらいつしやるのですが、そんなことは私にだめでございますってお断わりばかりしておりますの、そしたら自分で直接お話しに行くってよくおっしゃるのです。お帰しはできませんわね。ぶしつけをなさるような方なら何ですが、そんな方じゃございません。物越しでお話をしてあげになることだけを許してあげてくださいましね」

と言うと女王は非常に恥ずかしがって、

「私はお話のしかたも知らないのだから」

と言いながら部屋の奥のほうへ膝^{いざ}行って行くのがういういしく見えた。命婦は笑いながら、

「あまりに子供らしくいらつしやいます。どんな貴婦人といひましても、親が十分に保護していただく間だけは子供らしくしていてよろしくても、こんな寂しいお暮らしをし

ていらつしやりながら、あまりあなたのように羞恥しゅうちの觀念の強いことはまちがつています」

こんな忠告をした。人の言うことにそむかれない内気な性質の女王は、

「返辞をしないでただ聞いてだけいてもいいというのなら、格子でもおろしてここにいていい」

と言った。

「縁側におすわらせすることなどは失礼でございます。無理なことは決してなさいませんでしょう」

体裁よく言つて、次の室との間の襖からかみ子を命婦自身が確かに閉めて、隣室へ源氏の座の用意をしたのである。源氏は少し恥ずかしい気がした。人としてはじめて逢あう女にはどんなことを言つてよいかを知らないが、命婦が世話をしてくれるであろうと決めて座についた。乳母のような役をする老女たちは部屋へはいつて宵よいまど惑いの目を閉じているのである。若い二、三人の女房は有名な源氏の君の来訪に心をときめかせていた。よい服に着かえさせられながら女王自身は何の心の動揺もなさそうであつた。男はもとよりの美貌びぼうを目だたぬように化粧して、今夜はことさら艶えんに見えた。美の価値のわかる人などのいない所

だのにと命婦は氣の毒に思つた。命婦には女王がただおようにしているに相違ない点だけが安心だと思われた。会話に出過ぎた失策をしそうには見えないからである。自分の責めのがれにしたことで、氣の毒な女王をいつそう不幸にしないだろうかという不安はもつていた。源氏は相手の身柄を尊敬している心から利巧^{りこう}ぶりを見せる洒落^{しゃれぎ}氣の多い女よりも、氣の抜けたほどおようなこんな人のほうが感じがよいと思つていたが、襖子の向こうで、女房たちに勧められて少し座を進めた時に、かすかな衣被^{えびこう}香のにおいがしたので、自分の想像はまちがつていなかったと思ひ、長い間思い続けた恋であつたことなどを上手^{じょうず}に話しても、手紙の返事をしない人からはまた口ずからの返辭を受け取ることができなかった。「どうすればいいのです」

と源氏は歎^{たんそく}息した。

「いくそ度^{たび}君が沈黙^{しじま}に負けぬらん物な云^いひそと云はぬ頼みに

言いきつてくださいませんか。私の恋を受けてくださるのか、受けてくださらないかを」女王の乳母の娘で侍従という氣さくな若い女房が、見かねて、女王のそばへ寄つて女王

らしくして言った。

鐘つきとどめんことはさすがにて答へまうきぞかつはあやなき

若々しい声で、重々しくものの言えない人が代人でないようにして言ったので、貴女きじよとしては甘ったれた態度だと源氏は思ったが、はじめて相手にものを言わせたことがうれしくて、

「こちらが何とも言えなくなります、

云いはぬをも云まふに勝ると知りながら押しこめたるは苦ましかりけり」

いろいろと、それは実質のあることではなくても、誘惑的にもまじめにも源氏は語り続けたが、あの歌きりほかの返辞はなかった、こんな態度を男にとるのは特別な考えをもっている人なんだろうかと思うと、源氏は自身が軽侮くちおされているような口惜くちおしい気がした。その時に源氏は女王の室のほうへ櫛からかみ子をあけてはいったのである。命婦はうかうかと油

断をさせられたことで女王を気の毒に思うと、そこにもおられなくて、そしらぬふうをして自身の部屋のほうへ帰った。侍従などという若い女房は光源氏ということに好意を持っていて、主人をかばうことにもたいして力が出なかつたのである。こんなふうは何の心の用意もなく結婚してしまう女王に同情しているばかりであつた。女王はただ羞恥しゆううちの中にうずもれていた。源氏は結婚の初めのうちはこんなふうである女がよい、独身で長く大事がられてきた女はこんなものであらうと酌量しやくりやうして思いながらも、手探りに知つた女の様子に腑ふに落ちぬところもあるようだつた。愛情が新しく湧わいてくるようなことは少しもなかつた。歎息たんそくしながらまだ暁方に帰らうと源氏はした。命婦はどうなつたかと一夜じゆう心配で眠れなくて、この時の物音も知っていたが、黙っているほうがよいと思つて、「お送りいたしましょう」と挨拶あいさつの声も立てなかつた。源氏は静かに門を出て行つたのである。

二条の院へ歸つて、源氏は又寝またねをしながら、何事も空想したようにはいかないものであると思つて、ただ身分が並み並みの人でないために、一度きりの關係で退のいてしまうような態度の取れない点を煩悶はんもんするのだつた。そんな所へ頭中とうのちゆうじやう將が訪問してきた。「たいへんな朝寝なんですね。なんだかわけがありそうだ」

と言われて源氏は起き上がった。

「気楽な独り寝なものですから、いい気になって寝坊をしてしまいましたよ。御所からですか」

「そうです。まだ家へ帰っていないのですよ。朱雀院の行幸の日の楽の役と舞の役の人選が今日あるのだそうですから、大臣にも相談しようと思って退出したのです。そしてまたすぐに御所へ帰ります」

頭中将は忙しそうである。

「じゃあいっしょに行きましょう」

こう言つて、源氏は粥や強飯の朝食を客とともに済ませた。源氏の車も用意されてあったが二人は一つの車に乗ったのである。あなたは眠そうだななどと中将は言つて、

「私に隠すような秘密をあなたはたくさん持っていそうだ」
とも恨んでいた。

その日御所ではいろんな決定事項が多くて源氏も終日宮中で暮らした。新郎はその翌朝に早く手紙を送り、第二夜からの訪問を忠実に続けることが一般の礼儀であるから、自身で出かけられないまでも、せめて手紙を送つてやりたいと源氏は思っていたが、閑暇を得

て夕方に使いを出すことができた。雨が降っていた。こんな夜にちよつとでも行つてみようというほどにも源氏の心を惹くものは昨夜の新婦に見いだせなかった。

あちらでは時刻を計つて待つていたが源氏は来ない。命婦も女王をいたましく思つていた。女王自身はただ恥ずかしく思つてゐるだけで、今朝来るべきはずの手紙が夜になつてまで来ないことが何の苦勞にもならなかった。

夕霧の晴るるけしきもまだ見ぬにいぶせき添ふる宵の雨かな

この晴れ間をどんなに私は待ち遠しく思うことでしょう。

と源氏の手紙にはあつた。来そうもない様子に女房たちは悲観した。返事だけはぜひお書きになるようにと勧めても、まだ昨夜から頭を混乱させてゐる女王は、形式的に言えばいいこんな時の返歌も作れない。夜が更けてしまふからと侍従が氣をもんで代作した。

晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ同じ心にながめせずとも

書くことだけは自身でなければならぬと皆から言われて、紫色の紙であるが、古いので灰色がかったのへ、字はさすがに力のある字で書いた。中古の書風である。一所も散らしては書かず上下そろえて書かれてあつた。

失望して源氏は手紙を手から捨てた。今夜自分の行かないことで女はさぞ煩悶はんもんをしてゐるであらうとそんな情景を心に描いてみる源氏も煩悶はしてゐるのだった。けれども今さらしかたのないことである、いつまでも捨てずに愛してやろうと、源氏は結論としてこう思つたのであるが、それを知らない常陸ひたちの宮家の人々はだれもだれも暗い気持ちから救われなかつた。

夜になつてから退出する左大臣に伴われて源氏はその家へ行つた。行幸の日を楽しみにして、若い公達きんだちが集まるとその話が出る。舞曲の勉強をするのが仕事のようになつてゐたところであつたから、どこの家でも楽器の音をさせてゐるのである。左大臣の子息たちも、平生の楽器のほかの大筆おおひちりき筆、尺八などの、大きいものから太い声をたてる物も混ぜて、大がかりの合奏の稽古けいこをしていた。太鼓までも高欄の所へころがしてきて、そうした役はせぬことになつてゐる公達が自身でたたいたりもしてゐた。こんなことで源氏も毎日閑暇ひまがない。心から恋しい人の所へ行く時間を盗むことはできても、常陸の宮へ行つてよい時

間はなくて九月が終わってしまった。それでいよいよ行幸の日が近づいて来たわけで、試
楽とか何とか大騒ぎするころに命婦みょうぶは宮中へ出仕した。

「どうしているだろう」

源氏は不幸な相手をあわれむ心を顔に見せていた。大輔たゆうの命婦はいろいろと近ごろの様子を話した。

「あまりに御冷淡です。その方でも見ているものがこれではたまりません」

泣き出しそうにまでなっていた。悪い感じも源氏にとめさせないで、きれいに結末をつけようと願っていたこの女の意志も尊重しなかったことで、どんなに恨んでいるだろうとさえ源氏は思った。またあの人自身は例の無口なままで物思いを続けていることであろうと想像されてかわいそうであつた。

「とても忙しいのだよ。恨むのは無理だ」

歎息たんそくをして、それから、

「こちらがどう思っても感受性の乏しい人だからね。懲らそうとも思つて」

こう言つて源氏は微笑を見せた。若い美しいこの源氏の顔を見てみると、命婦も自身まで笑顔えがおになつていく気がした。だから恋の恨みを負わされる青春を持つていらつし

やるのだ、女に同情が薄くて我儘わがままをするのも道理なのだと思った。この行幸準備の用が少なくなつてから時々源氏は常陸の宮へ通つた。そのうち若紫を二条の院へ迎えたのであつたから、源氏は小女王を愛することに没頭していて、六条の貴女に逢うことも少なくなつていた。人の所へ通つて行くことは始終心にかけてみようと格別しないで時がた

常陸の女王のまだ顔も見せない深い羞恥しゆうちを取りのけてみようとも格別しないで時がたつた。あるいは源氏がこの人を顕あらわに見た刹那せつなから好きになる可能性があるとも言えるのである。手探りに不審な点があるのか、この人の顔を一度だけ見たいと思うこともあつたが、引つ込みのつかぬ幻滅を味わわされることも思うと不安だつた。だれも人の来ることを思わない、まだ深夜にならぬ時刻に源氏はそつと行つて、格子の間からのぞいて見た。けれど姫君はそんな所から見えるものでもなかつた。几帳きちようなどは非常に古びた物であるが、昔作られたままに皆きちんとかかつていた。どこから隙見すきみができるかと源氏は縁側をあちこちと歩いたが、隅すみの部屋にだけいる人が見えた。四、五人の女房である。食事台、食器、これらは支那製しなのものであるが、古くきたなくなつて見る影もない。女王の部屋から下げたそんなものを置いて、晩の食事をこの人たちはしているのである。皆寒そうであつた。白い服の何ともいえないほど煤すすけてきたなくなつた物の上に、堅気かたぎらしく裳もの形を

した物を後ろにくくりつけている。しかも古風に髪を櫛で後ろへ押えた額のかつこうなどを見ると、ないきようぼう内教坊（宮中の神前奉仕の女房が音楽の練習をしている所）やないしどころ内侍所ではこんなかつこうをした者がいると思えて源氏はおかしかった。こんなふうを人間に仕える女房もしているものとはこれまで源氏は知らなんだ。

「まあ寒い年。長生きをしているとこんな冬にも逢いますよ」

そう言つて泣く者もある。

「宮様がおいになつた時代に、なぜ私は心細いお家うちだなどと思つたのだろう。その時よりもまたどれだけひどくなつたかもしれないのに、やつぱり私は我慢して御奉公している」

その女は両袖そでをばたばたといわせて、今にも空中へ飛び上がってしまうようにふる慄えている。生活についての剥むき出しな、きまりの悪くなるような話ばかりするので、聞いていて恥はずかしくなつた源氏は、そこから退のいて、今来たように格子をたたいたのであつた。

「さあ、さあ」

などと言つて、灯ひを明るくして、格子を上げて源氏を迎えた。侍従は一方でさいいん齋院の女房を勤めていたからこのごろは来ていないのである。それがいないのでいつそうすべての

調子が野暮^{やぼ}らしかつた。先刻老人たちの愁^{うれ}えていた雪がますます大降りになってきた。すごい空の下を暴風が吹いて、灯の消えた時にも点^つけ直そうとする者はない。某^{なにがし}の院^{もの}の物^{もの}の怪^けの出た夜が源氏に思い出されるのである。荒廢のしかたはそれに劣らない家であつても、室の狭いのと、人間があの時よりは多い点だけを慰めに思えば思えるのであるが、ものすごい夜で、不安な思いに絶えず目がさめた。こんなことはかえつて女への愛を深くさせるものなのであるが、心を惹^ひきつける何物をも持たない相手に源氏は失望を覚えるばかりであつた。やつと夜が明けて行きそうであつたから、源氏は自身で格子を上げて、近い庭の雪の景色^{けしき}を見た。人の踏み開いた跡もなく、遠い所まで白く寂しく雪が続いていた。今ここから出て行ってしまうのもかわいそうに思われて言った。

「夜明けのおもしろい空の色でもいつしよにおながめなさい。いつまでもよそよそしくしていらいしやるのが苦しくてならない」

まだ空はほの暗いのであるが、積もった雪の光で常よりも源氏の顔は若々しく美しく見えた。老いた女房たちは目の楽しみを与えられて幸福であつた。

「さあ早くお出なさいまし、そんなにしていらいしやるのはいけません。素直になさるのがいいのでございますよ」

などと注意をすると、この極端に内気な人にも、人の言うことは何でもそむけないところがあつて、姿を繕いながら膝行^{いざ}つて出た。源氏はその方は見ないようにして雪をながめるふうはしながらも横目は使わないでもない。どうだろう、この人から美しい所を発見することができたらうれしかろうと源氏の思うのは無理な望みである。すわった背中の中の長く伸びていることが第一に目へ映つた。はつとした。その次に並みはずれなものは鼻だつた。注意がそれに引かれる。普賢菩薩^{ふけんぼさつ}の乗つた象という獣が思われるのである。高く長くて、先のほうが下に垂^たれた形のそこだけが赤かつた。それがいちばんひどい容貌^{きりよう}の欠陥だと見える。顔色は雪以上に白くて青みがあつた。額が腫^{ふく}れたように高いのであるが、それでいて下方の長い顔に見えるというのは、全体がよくよく長い顔であることが思われる。瘦^やせぎすなことはかわいそうなくらいで、肩のあたりなどは痛かろうと思われるほど骨が着物を持ち上げていた。なぜすっかり見てしまったのであろうと後悔をしながらも源氏は、あまりに普通でない顔に気を取られていた。頭の形と、髪のかかりぐあいだけは、平生美人だと思つている人にもあまり劣つていないようで、裾^{すそ}が桂^{うちぎ}の裾をいっぱいにした余りがまだ一尺くらいも外へはずれていた。その女王の服装までも言うのはあまりにはしたないようではあるが、昔の小説にも女の着ている物のことは真^ま先^{つぎ}に語られるものであ

るから書いてもよいかと思う。桃色の変色してしまったのを重ねた上に、何色かの真黒まつくろに見える桂うちぎ、黒貂くふるぎの毛の香のする皮衣を着ていた。毛皮は古風な貴族らしい着用品ではあるが、若い女に似合うはずのものでなく、ただ目だつて異様だった。しかしながらこの服装でなければ寒気が堪えられぬと思える顔であるのを源氏は氣の毒に思つて見た。何ともものが言えない。相手と同じように無言の人に自身までがなつた氣がしたが、この人が初めからものを言わなかつたわけも明らかにしようとして何かと尋ねかけた。袖そでで深く口を被おほうているのもたまらなく野暮やぼな形である。自然肱ひじが張られて練つて歩く儀式官の袖が思われた。さすがに笑顔えがおになつた女の顔は品も何もない醜さを現わしていた。源氏は長く見ていることがかわいそうになつて、思つたよりも早く歸つて行こうとした。

「どなたもお世話をする人のないあなたと知つて結婚した私には何も御遠慮なんかなさらないで、必要なものがあつたら言つてくださると私は満足しますよ。私を信じてくださらないから恨めしいのですよ」

などと、早く出て行く口実をさえ作つて、

朝日さす軒のたるひは解けながらなどかつららの結ほほるらん

と言ってみても、「むむ」と口の中で笑っただけで、返歌の出そうにない様子が気の毒なので、源氏はそこを出て行ってしまった。

中門の車寄せの所が曲がつてよろよになつていた。夜と朝とは荒廃の度が違つて見えるものである、どこもかしこも目に見える物ははじめでたまらない姿ばかりであるのに、松の木へだけは暖かそうに雪が積もつていた。田舎で見えるような身にしむ景色であることに源氏は感じながら、いつか品定めに律の門の中ということ人を人が言つたが、これはそれに相当する家であろう。ほんとうにあの人たちの言つたように、こんな家に可憐な恋人を置いて、いつもその人を思つていたらおもしろいことであろう、自分の、思つてならぬ人と思う苦しみはそれによつて慰められるであろうがと思つて、これは詩的な境遇にいながらんらの男を引きつける力のない女であると断案を下しながらも、自分以外の男はあの人を終世変わりない妻として置くことはできない、自分があの人のおとな良人になつたのも、気がかりに思いになつたはずの父宮の靈魂が導いて行つたことであろうと思つたのであつた。うずめられている橘の木の雪を随身に払わせた時、横の松の木がうらやましそうに自力で起き上がつて、さつと雪をこぼした。たいした教養はなくてもこんな時に風流を言葉

で言いかわす人がせめて一人でもいないのだろうかと思つた。車の通れる門はまだ開けてなかつたので、供の者が鍵を借りに行くと、非常な老人の召使が出て来た。そのあとから、娘とも孫とも見える、子供と大人の間くらいとよりの女が、着物は雪との対照であくまできたなく汚れて見えるようなのを着て、寒そうに何か小さい物に火を入れて袖の中で持ちながらついて来た。雪の中の門が老人の手で開かぬのを見てその娘が助けた。なかなか開かない。源氏の供の者が手伝つたのではじめて扉が左右に開かれた。

ふりにける頭の雪を見る人も劣らずぬらす朝の袖かな

と歌い、また、「霰雪白紛紛、幼者形不蔽」と吟じていたが、白楽天のそ

の詩の終わりの句に鼻のことが言つてあるのを思つて源氏は微笑された。頭中将があの自分の新婦を見たらどんな批評をすることだろう、何の譬喩を用いて言うだろう、自分の行動に目を離さない人であるから、そのうちこの關係に気がつくであらうと思うと源氏は救われがたい気がした。女王が普通の容貌きりようの女であつたら、源氏はいつでもその人から離れて行つてもよかつたであらうが、醜い姿をはつきりと見た時から、かえつてあわれむ心

が強くなつて、良人^{おつと}らしく、物質的の補助などもよくしてやるようになった。黒貂^{くろぎ}の毛皮でない絹、綾^{あや}、綿、老いた女たちの着料になる物、門番の老人に与える物までも贈つたのである。こんなことは自尊心のある女には堪えがたいことに違いないが常陸^{ひたち}の宮の女王はそれを素直に喜んで受けるのに源氏は安心して、せめてそうした世話をよくしてやりたいという気になり、生活費などものちには与えた。

灯影^{ほかげ}で見た空蟬^{うつせみ}の横顔が美しいものではなかったが、姿態の優美さは十分の魅力があった。常陸^{ひたち}の宮の姫君はそれより品の悪いはずもない身分の人ではないか、そんなことを思うと上品であるということは身柄によらぬことがわかる。男に対する洗練された態度、正義の観念の強さ、ついには負けて退却をしたなどと源氏は何かのことにつけて空蟬が思ひ出された。

その年の暮れの押しつまつたところに、源氏の御所の宿直所^{とのいどころ}へ大輔^{たゆう}の命婦^{みようぶ}が来た。源氏は髪を梳^すかせたりする用事をさせるのには、恋愛関係などのない女で、しかも戯談^{じやうだん}の言えるような女を選んで、この人などがよくその役に当たるのである。呼ばれない時でも大輔はそうした心安さからよく桐壺^{きりつぼ}へ来た。

「変なことがあるのでございますがね。申し上げないでおりますのも意地が悪いようにと

られることですし、困ってしまったて上がったのでございます」

微笑ほほえみを見せながらそのあとを大輔は言わない。

「なんだろう。私には何も隠すことなんかない君だと思っているのに」

「いいえ、私自身のこととございましたら、もったいないことですすがあなた様に御相談に上がって申し上げます。この話だけは困ってしまいました」

なお言おうとしないのを、源氏は例のようにこの女がまた思わせぶりを始めたと見ていた。

「常陸の宮から参ったのでございます」

こう言って命婦は手紙を出した。

「じや何も君が隠さねばならぬわけもないじやないか」

こうは言ったが、受け取った源氏は当惑した。もう古くて厚ぼったくなつた檀紙だんしに薫くんこ香かうのにおいだけはよくつけてあった。ともかくも手紙の体ていはなしているのである。歌もある。

唐衣からころも君が心のつらければ袂たもとはかくぞそぼちつつのみ

何のことかと思っていると、おおげさな包みの衣裳箱いしやうばこを命婦は前へ出した。

「これがきまり悪くなくてきまりの悪いことつてございませんでしよう。お正月のお召めしにというつもりでわざわざおつかわしになったようでございますから、お返しする勇氣も私にございません。私の所へ置いておきましても先様の志を無視することになるでしようから、とにかくお目にかけてから処分をいたすことにしようと思うのでございます」

「君の所へ留めて置かれたらたいへんだよ。着物の世話をしてくれる家族もないのだからね、御親切をありがたく受けるよ」

とは言つたが、もう戯談じやうだんも口から出なかつた。それにしてもまずい歌である。これは自作に違いない、侍従がおれば筆を入れるところなのだが、そのほかには先生はないのだからと思うと、その人の歌作に苦心をする様子が想像されておかしくて、

「もつたいない貴婦人と言わなければならぬのかもしれない」

と言いながら源氏は微笑して手紙と贈り物の箱をながめていた。命婦は真赤まつかになつていた。臍脂えんじの我慢のできないような色に出た直衣のうしで、裏も野暮やぼに濃い、思いきり下品なその端々が外から見えているのである。悪感を覚えた源氏が、女の手紙の上へ無駄書き

をするようにして書いているのを命婦が横目で見てみると、

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花すゑつむはなを袖そでに触れけん

色濃き花と見しかども、とも読まれた。花という字にわけがありそうだと、月のさし込んだ夜などに時々見た女王の顔を命婦は思い出して、源氏のいたずら書きをひどいと思いつながらもしまいにはおかしくなった。

「くれなるのひとはな衣ぎころもうすくともひたすら朽たす名をし立てずば

その我慢も人生の勤めでございますよ」

理解があるらしくこんなことを言っている命婦もたいした女ではないが、せめてこれだけの才分でもあの人になればよかったと源氏は残念な気がした。身分が身分である、自分から捨てられたというような気の毒な名は立てさせたくないと思うのが源氏の真意だった。ここへ伺候して来る人の足音がしたので、

「これを隠そうかね。男はこんな真似まねも時々しなくてはならないのかね」

源氏はいまいますように言った。なぜお目にかけたらう、自分までが浅薄な人間に思われるだけだったと恥ずかしくなり命婦はそつと去ってしまった。

翌日命婦が清涼殿に出ていると、その台盤だいばんどころ所を源氏がのぞいて、

「さあ返事だよ。どうも晴れがましくて堅くなってしまったよ」

と手紙を投げた。おおぜいいた女官たちは源氏の手紙の内容をいろいろに想像した。

「たたらめの花のごと、三笠みかさの山の少女をとめをば棄すてて」という歌詞を歌いながら源氏は行つてしまった。また赤い花の歌であると思うと、命婦はおかしくなって笑っていた。理由を知らない女房らは口々に、

「なぜひとり笑いをしていらつしやるの」

と言った。

「いいえ寒い霜の朝にね、『たたらめの花のごと搔練かいねり好むや』という歌のように、赤くなつた鼻を紛らすように赤い搔練を着ていたのをいつか見つけたのでしよう」

と大輔の命婦が言うと、

「わざわざあんな歌をお歌いになるほど赤い鼻の人もここにはいないでしょう。左近さこんの命

婦さんか肥後の采女がいつしよだったのでしょうか、その時は」

などと、その人たちは源氏の謎の意味に自身らが関係のあるようにもないようにも言つて騒いでいた。

命婦が持たせてよこした源氏の返書を、常陸の宮では、女房が集まって大騒ぎして読んだ。

逢はぬ夜を隔つる中の衣手に重ねていとど身も沁みよとや

ただ白い紙へ無造作に書いてあるのが非常に美しい。

三十日の夕方に宮家から贈った衣箱の中へ、源氏が他から贈られた白い小袖の一重ね、赤紫の織物の上衣、そのほかにも山吹色とかいろいろな物を入れたのを命婦が持たせてよこした。

「こちらでお作りになったのがよい色じゃなかったというあてつけの意味があるのではないでしょうか」

と一人の女房が言うように、だれも常識で考えてそうとれるのであるが、

「でもあれだって赤くて、重々しいできればでしたよ。まさかこちらの好意がむだになるということはないはずですよ」

老いた女どもはそう決めてしまった。

「お歌だって、こちらのは意味が強く徹底しておできになっていましたよ。御返歌は技巧が勝ち過ぎてますね」

これもその連中の言うことである。すえつむはな末摘花も大苦心をした結晶であつたから、自作を紙に書いておいた。

元三日が過ぎてまた今年は男踏歌おとことうかであちらこちらと若い公達きんだちが歌舞をしてまわる騒ぎの中でも、寂しい常陸の宮を思いやっていた源氏は、七日の白馬あおうまの節会せちえが済んでから、お常御殿を下がつて、桐壺きりつぼで泊まるふうを見せながら夜がふけてから末摘花の所へ来た。これまでに変わつてこの家が普通の家らしくなっていた。女王の姿も少し女らしいところができたとに思われた。すっかり見違えるほどの人にできればどんなに犠牲の払いがあるであろうなども源氏は思っていた。日の出るころまでもゆるりと翌朝はとどまっていたのである。東側の妻戸をあけると、そこから向こうへ続いた廊がこわれてしまっているの、すぐ戸口から日はいってきた。少しばかり積もっていた雪の光も混じつて室

内の物が皆よく見えた。源氏が直衣のうしを着たりするのをながめながら横向きに寝た末摘花の頭の形もその辺の畳にこぼれ出している髪も美しかった。この人の顔も美しく見うる時が至つたらと、こんなことを未来に望みながら格子こうしを源氏が上げた。かつてこの人を残らず見てしまった雪の夜明けに後悔されたことも思い出して、ずっと上へは格子を押し上げずに、脇きょうそく息をそこへ寄せて支えにした。源氏が髪の乱れたのを直していると、非常に古くなつた鏡台とか、支那出来の櫛箱くしばこ、搔かき上げの箱などを女房が運んで来た。さすがに普通の所にはちよつとそろえてあるものでもない男専用の髪道具もあるのを源氏はおもしろく思った。末摘花が現代人風になつたと見えるのは三十日に贈られた衣箱の中の物がすべてそのまま用いられているからであるとは源氏の気づかないところであつた。よい模様であると思つた桂うづきにだけは見覚えのある気がした。

「春になつたのですからね。今日は声も少しお聞かせなさいよ、鶯うぐいすよりも何よりもそれが待ち遠しかつたのですよ」

と言うと、「さへづる春は」（ももちどりさへづる）百千鳥囀る春は物ごとに改まれどもわれぞ古ふり行くゆ）とだけをやつと小声で言つた。

「ありがとう。二年越しにやつと報いられた」

と笑つて、「忘れては夢かとぞ思ふ」という古歌を口にしながら歸つて行く源氏を見送るが、口を被^{おお}うた袖^{そで}の蔭^{かげ}から例の末摘花が赤く見えていた。見苦しいことであると歩きながら源氏は思つた。

二条の院へ歸つて源氏の見た、半分だけ大人のような姿の若紫がかわいかった。紅^{あか}い色の感じはこの人からも受け取れるが、こんなになつかしい紅もあるのだつたと見えた。無地の桜色の細長を柔らかに着なした人の無邪氣な身の取りなしが美しくかわいいのである。昔風の祖母の好みでまだ染めてなかつた齒を黒くさせたことによつて、美しい眉^{まゆ}も引き立つて見えた。自分のすることであるがなぜつまらぬいろいろな女を情人に持つのだろう、こんなに可憐^{かれん}な人とばかりいないでと源氏は思いながらいつものように雛遊^{ひな}びの仲間になつた。紫の君は絵をかいて彩色したりもしていた。何をしても美しい性質がそれにあふれて見えるようである。源氏もいっしよに絵をかいだ。髪の毛の長い女をかいだ、鼻に紅をつけて見た。絵でもそんなのは醜^{みにく}い。源氏はまた鏡に写る美しい自身の顔を見ながら、筆で鼻を赤く塗つてみると、どんな美貌^{びぼう}にも赤い鼻の一つ混じっていることは見苦しく思われた。若紫が見て、おかしがつて笑つた。

「私がこんな不具者になつたらどうだろう」

と言うと、

「いやでしようね」

と言つて、しみ込んでしまわないかと紫の君は心配していた。源氏は拭く真似だけをして見せて、

「どうしても白くならない。ばかなことをしましたね。陛下はどうおっしゃるだろう」
まじめな顔をして言うと、かわいそうでならないように同情して、そばへ寄つて硯の水入れの水を檀紙にしませて、若紫が鼻の紅を拭く。

「平仲の話のように墨なんかをこの上に塗つてはいけませんよ。赤いほうはまだ我慢ができる」

こんなことをしてふざけている二人は若々しく美しい。

初春らしく霞を帯びた空の下に、いつ花を咲かせるのかとたよりなく思われる木の多い中に、梅だけが美しく花を持つていて特別なすぐれた木のように思われたが、緑の階隠しのそばの紅梅はことに早く咲く木であつたから、枝がもう真赤に見えた。

くれなるの花ぞあやなく疎まるる梅の立枝はなつかしけれど

そんなことをだれが予期しようぞと源氏は歎息した。末摘花、若紫、こんな人たちはそれからどうなったか。

（訳注） この巻は「若紫」の巻と同年の一月から始まっている。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：門田裕志

2003年7月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

未摘花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>